

## 『週刊プレイボーイ』にみる男らしさの変遷

彼島瑞生

今日の日本社会において「男らしさ」は消えつつある概念であると指摘されている。「男らしさ」の消滅の歴史について著したコルバンら（2018）は「男らしさのモデルは忘れられ、消滅し、つまらない郷愁の対象になる定めであり、ついには『男らしさ』という言葉そのものが無意味になるかもしれない」と述べている。こうしたなかで、「男らしさ」の意味を問い直す動きが起こっている。コンネル（1993）の提唱した「男らしさ」の分析枠組みである男性性の社会理論では、「男らしさ」を含めた男性性を複雑で多様なものとみなし、その代表例として（1）覇権的な男性性（hegemonic masculinity）と（2）従属的男性性（subordinated masculinity）を示している。従属的男性性のパターンとしてコンネルは同性愛を挙げている。

本研究では、1966年の創刊から50余年の歴史をもつ男性雑誌『週刊プレイボーイ』（集英社）において、「同性愛」を取り上げた記事を通して、同性愛に対する姿勢の変遷とそこに表れる男性性を分析することを試みた。創刊当初から「男らしさ」を意識してきた男性雑誌が、従属的男性性である同性愛に対してどのような立場を取ってきたかを見ることで、『週刊プレイボーイ』が示す男性性の特徴が明らかになるのではないかと考えた。

「大宅壮一文庫雑誌記事索引」によると、「同性愛」に関する記述は1979年、「ホモ」に関する記述は1967年に登場した。どちらもはじめは外国の社会問題化を受けて、その論調をそのまま取り上げる形の記事であった。しかしその後、読者からの投稿、あるいは読者層の若者男性の動きを受けて、理解と応援する姿勢を示すようになった。そして1990年代、同性愛が社会に受け入れられるようになると、異性愛に疲れた男性視点での同性愛への憧れをあらわす描写がたびたび描かれる。2000年代に入ると、国内のLGBT問題を取り上げる形で再び社会問題として扱われるようになった。この一連の流れの背景には、創刊当初に編集部が意識した「男らしさ」は覇権的男性性であったのが、1970年後半に「新しい男らしさ」として従属的男性性を示すようになった、という編集部側の方針転換があったことが送り手側へのインタビューを通して明らかになった。

『週刊プレイボーイ』の記事に見られる「疲れ果てた男性性」と「同性愛に対する憧れの視線」は、渡辺（1987）が指摘する「男性性優位社会の崩壊」とそれに伴って女性に対して恐怖を抱く（同性愛者になる）という現象とほぼ同様の傾向が見られた。

（指導教員 逸村裕）